

まえがき

二〇一三年一二月に発行された拙著『日本「原子力ムラ」行状記』（論創社）は、主に、原子力開発半世紀の中心をなした日本原子力研究所における隠蔽と不祥事の数々を白日の下に曝したものです。大変、大きな反響を呼びました。私の問題提起は成功したものと思います。

本書は、そのパートⅡ的位置づけですが、まったく同じ分析方法論に則ったものの、分析対象がやや異なっており、主に、二〇一一年三月一日に発生した福島第一原発事故後に焦点を絞り、事故調査手法や事故調報告書の内容について、さらに、それらにかかわったひとたちの専門性や社会対応を中心に、独自の分析手法と工学的専門知識を基に、まとめたものです。

そのため、福島第一原発事故をリアルタイムで分析する上で欠かせない基本的な三編の文献、すなわち、米原子力委員会研究報告書「原子炉安全性研究」(Atomic Energy Commission, Reactor Safety Study, WASH-1400, 1975)、米物理学会研究報告書「軽水炉安全性研究グループ報告」(Report to the APS by the Study Group on Light Water Reactor Safety, Rev. Mod. Phys., Vol. 47, Supplement No.1, Summer, 1975)、米原子力規制委員会研究報告書「苛酷炉心損傷事故リスク——米五基の原発の安全評価」(Nuclear Regulatory Commission, Severe Accident Risks: An Assessment for five U.S. Nuclear Power Plants, NUREG-1150, 1990) については、引用程度にとどめました。

それらに替わり、頻繁に引用した文献は、各種事故調査委員会の検討資料となった、東京電力編「福島第一原子力発電所 東北地方太平洋沖地震に伴う原子炉施設への影響について」（東京電力、二〇一一・九）、東京電力編「福島第一原子力発電所 東北地方太平洋沖地震に伴う原子炉施設への影響について」（東京電力、二〇一二・五）、東京電力編「福島原子力事故調査報告書」（東京電力、二〇一二・六）の三編です。三番目の報告書は一番目と二番目の報告書の統一版的位置づけです。いずれも、図表・写真を含め、本文だけでも、約三〇〇頁に及ぶ一次資料と位置づけられる貴重な文献です。各種事故調査報告書は三編の東京電力編報告書の単なる批判的検討結果にすぎません。東京電力は、事故当事者として、できるだけ早く情報を公開するため、限られた時間内での作業によるものであるため、すべてが正しいわけではなく、部分的には、不十分な調査内容や誤った計算結果が記載されているかもしれません。そのため、引用者は、慎重な解読と吟味が欠かせません。

私は、それら三編の文献を三年間に数十回ほど熟読・吟味しましたが、そのまま鵜呑みにせず、慎重を期すため、疑問点は、東京電力に問い合わせました。単に、メールでの質問だけでなく、場合によっては、聞き取り調査（渡辺文夫・山内宏太郎、一九九八、一二三―一四八「調査的面接法」、高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編著『人間科学研究法ハンドブック〔第二版〕』ナカニシヤ出版、二〇一二）、関連現場の見学・調査も併せて実施しました。

私は、福島第一原発事故後、東海第二原発（二〇一一年七月と二〇一二年二月）、福島第二原発（二〇一三年四月）、柏崎刈羽原発（二〇一三年四月）、福島第一原発（二〇一四年四月）の見学・調査を実施しました。特に、東海第二原発と柏崎刈羽原発では、原子力規制委員会が定めた新原発技術

基準に対応するため、福島第一原発事故の徹底分析から抽出された遵守事項を中心に、工学的安全対策が施されていきました。本書にはそれらの調査結果も含めました。

私は、それらの原発の見学・調査で、いくつかの新情報を得ました。その代表的な一つは圧力逃し安全弁 (Safety Relief Valve : SR) の制御用圧縮空気圧 (高圧窒素ゲージ圧 11・311・2・8気圧) です。代表的なもう一つは福島第一原発一号機の非常用復水器 (Isolation Condenser : IC) の配管とサポート材の取り換え時期 (配管「水側」は、第六回定期検査〔一九七八年度〕に格納容器外側隔離弁―再循環系接続部を交換、配管「蒸気側」は、第八回定期検査〔一九八一年度〕にすべて交換、管束は、第一七回定期検査〔一九九三年度〕にすべて交換) です。本書の本文にはそれらのことが織り込まれています。

原発の安全性を評価する場合、材料の経年変化 (Aging) が重要な評価項目の一つになります。しかし、多くのひとたちは、建設時のものがそのまま利用されていると錯覚しています。加圧水型原子炉は、必ずしもそうではありませんが、福島第一原発のような第一世代の沸騰水型原子炉の場合、機器・配管などの応力腐食割れ (Stress Corrosion Cracking : SCC) 対策の一環として、原子炉压力容器 (Reactor Pressure Vessel : RPV) と原子炉格納容器 (Primary Containment Vessel : PCV) とコンクリート構造物以外は、すべて、取り替えてあります。

福島第一原発事故には、まだ、よく分かっていないことが数多くあります。そのため、どのように解釈することも可能です。国会事故調報告書は工学的根拠のないことに対しても「可能性の示唆」をしました。それは事故調査の方法としては禁じ手です。私は、事故調査の基本的な考え方と

して遵守しなければならない「工学的観測データに真実を語らせる」ことに徹しました。

私は、本書をまとめるにあたり、特に、留意したことがあります。それは、拙著『福島原発事故の科学』（日本評論社、二〇一二）で実施したように、極力、推定は排除することです。本書の議論においては、特に、重要な工学的解釈の場合、できるだけ細かく文献を引用しておきました。本書には、学術的記載も含まれますが、決して、学術書ではなく、できるだけ多くのひとたちに読んでいただくため、意識的に、肩の凝らない読み物にしました。工学的解釈においては、方程式や計算過程をこまごまと展開することは、意識的に回避しました。記憶と専門知識を基に、間違いがないように、十分に注意したつもりですが、意図に反し、何らかの不的確な表現が含まれているかもしれません。賢明な読者諸氏のご批判を仰ぎたい。

二〇一四年六月

桜井 淳

日本「原子力ムラ」惨状記——福島第1原発の真実

目次

第1章 福島第一原発事故

1	「政府」「国会」事故調報告書分析	2
2	世の中の情報の質についての考察	7
3	田辺文也『メルトダウン——放射能放出はこうして起こった』の分析	16
4	軽水炉の安全性や被曝リスクについて解説したひとたちの専門性	21
5	新聞社の知り合いからのメールへの返信	24
6	塩谷喜雄『「原発事故報告書」の真実とウソ』の感想	26
7	今中哲二「低線量放射線被曝——チェルノブイリから福島へ」の感想	31
8	チェルノブイリから学ぶべきこと	34
9	福島の事故でまだ分かっていないこと	36
10	福島の事故後に討論された「低線量被曝リスク」について到達した結論	38
11	福島第一高濃度汚染水漏洩事故は「レベル3」	41
12	藤原節男さんの「核爆発説」の虚構	42
13	元原研研究員の田辺文也さんの原子炉熱流動安全解析能力への疑問	44
14	使用済み燃料貯蔵プールの貯蔵ラックの最近の材質	48
15	福島第一原発事故調査に見る二つの対照的な事故調査の方法	49

16	事故時内圧降下のための「ブローアウトパネル」……………	51
17	「可能性示唆」という問題提起型の学問的価値への疑念……………	52
18	そのままで利用できない電力会社などの公開資料……………	54
19	格納容器内で毎時二三〇ℓ以内の漏水なら技術基準以内……………	55
20	二号機格納容器ドライウェル漏洩があるとすればどの部位か……………	57
21	地震時の原発の耐震性を工学的にどのように考えるのか？……………	58
22	中西準子さんの「リスク学」の特徴……………	61
23	東京電力汚染水問題の難しさの根源……………	62
24	槌田敦さんの不可解な社会対応への助言……………	63
25	Xさんへの手紙……………	66
26	事故調報告書は東電資料の批判的要約……………	69
27	福島第一原発三号機爆発原因について……………	71
第Ⅱ章 原子力安全規制		
1	原研の初期の頃の歴史的不祥事……………	74
2	元原子力安全委員会委員長鈴木篤之さんの隠された小さな不祥事……………	75
3	「元原子力安全委員会委員」の肩書を隠蔽する早田邦久さんに違和感……………	77
4	高い専門と責任と倫理が求められている原子力規制委員会……………	79
5	危うい原子力規制委員会の機能……………	79

第Ⅲ章 社会論

6	ストレステスト解析をメーカーに丸投げした電力会社と原子力機構の技術力	81
7	取り扱いが困難な原発敷地内の活断層	82
8	もめにもめる敦賀原発の活断層評価問題	84
9	活断層の判定を誤れば原子力規制委員会全員辞任しなければならない	86
10	昔の甘い活断層評価のツケがいまになって	86
11	限りなくゼロに近い原子力事業者の活断層に対する認識と調査評価能力	88
12	柏崎刈羽原発訪問報告——新基準対応	91
13	原子力規制委による各事故調報告書の不一致項目の調査についての考察	95
14	原子力規制の空洞化は改善されたのか?	97
15	阿部清治さんと小川徹さんの許されざる大罪	99
16	原子力規制委員会は、即刻、辞任せよ!	101
17	各県原子力安全対策委員会は無能な追認組織	104
1	元自民党幹事長の野中広務さんが明かした内閣機密費のバラマキ先	106
2	河合弘之先生と海渡雄一先生への福島原発事故不起訴についてのメール	108
3	北朝鮮のウラン濃縮の記事について『AERA』編集者へのメール	110
4	脱原発の民意は衆議院議員総選挙に反映されたのか?	111
5	安倍晋三首相の精神状態を疑う	113

6	脱原発の民意の二重性を読みきれなかった日本未来の党と社民党	114
7	東海第二原発の地元の東海村村長選挙の行方	115
8	自民党安倍晋三内閣の超タカ派政策の危険性	116
9	スリーマイル島と福島第一の事故は奇蹟的なほど幸運な結果だった	118
10	危機管理として余裕度をどのくらい設けるのが最適なのか？	120
11	非現実的で受け入れがたい軽水炉推進の論理構造	121
12	導入技術至上主義の弊害がもたらした福島第一原発事故	123
13	福島第一原発事故の真実らしきことが分かるのは一〇年後	124
14	「原子力ムラ」の社会認識や技術判断はなぜ甘く醸成されたのか？	125
15	「原子力ムラ」は沈黙していただけで中身は何も変わっていません	126
16	「原子力ムラ」の分かつていないひとたち	127
17	科学技術社会論学会第一一回研究大会における発表内容への違和感	129
18	事故後も事故前とまったく同じいまの原子力界の体質	131
19	「もんじゅ」の事故後一七年間の不思議な世界	132
20	サンオノフレ原発廃炉の主因にされた三菱重工業の認識不足	134
21	青山繁晴独立総研社長は政府安全保障会議委員を即刻辞任せよ	136
22	近藤駿介原子力委員長と鈴木達治郎同委員長代理は即刻辞任せよ	137
23	「原子力ムラ」のサバイバル手法としての日本原子力安全推進協会	137
24	ロシアや中国や北朝鮮のニセ情報に引かかった先進国の軽率な知識人たち	138

第Ⅳ章 現代技術

25	中国のいまの産業技術をどのように評価すべきなのか？	140
26	『原発と裁判官』の著者への助言	143
27	「もんじゅ」プロジェクトを食い物にした官僚と事業者と原子炉メーカー	145
28	原子力界の平均的な被曝リスク認識	146
29	懸念される福島第一原発における従事者被曝の長期的リスク	148
30	小出裕章さんと渡辺満久さんの共通点と相違点	149
31	文部科学省原子力機構改革本部中間報告への視点	150
32	『朝日新聞』一面に掲載された原発全停電時の安全性評価論争の記憶	151
33	二〇二〇年東京オリンピックの「経済効果」と首都直下型地震の「リスク」	152
34	『原発ホワイต์アウト』の解説——記者でも書ける内容	153
35	世界の原子力施設の中で日本にしかない「心の世界」	160
36	『塀の上を走れ——田原総一郎自伝』を読む	162
第Ⅳ章 現代技術		
1	首都直下型と東南海の巨大地震になぜ備えられないのか？	165
2	監視社会の社会的功罪——プライバシー侵害だが犯罪捜査には効果	167
3	「メールなりすまし犯」の幼稚な手口	170
4	ツイッター利用の有効性について	172
5	現代技術の構造分析——最近のいくつかの事例から	173

第V章 考察

6	続発するB787のトラブル——リチウムイオンバッテリーの弱点……………	176
7	商用技術で乗客をモルモットに耐久試験するエンジニアの狂気……………	179
8	地下トンネル方式の中央リニア新幹線は本当に必要なのか？……………	180
9	中央道笹子トンネルの天井コンクリート板の落下事故の必然性……………	181
10	鹿島建設と大成建設のビル解体法について……………	184
11	原発八基に対する即刻廃炉の根拠……………	185
12	三・一一後でも原子力依存体質を変えない原子力自治体の不可解さ……………	186
13	北朝鮮の「プースター原爆」と軽量化の間には相関関係があるのか？……………	186
14	田窪雅文主宰「核情報」の不確実性……………	188
15	北朝鮮の「強化原爆」の本質的・歴史的・政治的な意味……………	191
1	「畑村失敗学」の失敗の原因——「政府事故調報告書」の欠陥……………	193
2	国会事故調査委員会の技術力を疑う——非常用復水器の作動を巡って……………	202
3	福島第一原発事故における東京電力エンジニアの専門性……………	205
4	吉岡斉発言の虚構性……………	207
5	運動論主体で工学的根拠なき「高木グループ」への違和感……………	209
6	「国会事故調報告書」の未熟な検討結果……………	213
7	NHK福島第一原発事故分析番組の信頼性——仮説の主張だけで実証なし……………	214

8	大前研一「国会事故調の報告書は何の役にも立たない」への違和感	217
9	『朝日新聞』連載「プロメテウスの罠——シリーズ追いかける男」の感想	221
10	「原子力市民委員会中間報告書」の感想	237
11	「原子力学会福島第一原発事故調報告書」を解説して分かったこと	241
12	東電偽証問題——隠された真実は何か？	243
13	朝日新聞社東京本社経済部木村英昭記者への疑問	246
14	東京電力の虚偽発言の背景と原子力規制委員会の現場調査の留意点	250

第Ⅵ章 結論——三・一一以降に福島の事故について考えてきたこと

1	報道内容の不確実性	252
2	福島第一原発事故について	253
3	福島第二原発事故について	253
4	田中三彦さんが主張する工学的根拠なきエッセーレベルの問題提起	254
5	田辺文也さんが主張する工学的根拠なきエッセーレベルの問題提起	260
6	四事故調報告書の不確実性	264
7	プラントデータを基にした福島第一原発の事故解析	266
8	ドイツの電力需給バランスと「脱原子力」の可能性	267
	あとがき	269

日本「原子力ムラ」惨状記

——福島第1原発の真実

第Ⅰ章 福島第一原発事故

1 「政府」「国会」事故調報告書分析

- 東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会編『政府事故調最終報告書』（メデアランド、二〇一二）

- 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会編『国会事故調報告書』（徳間書店、二〇一二）
 - 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会編『国会事故調会議録』（徳間書店、二〇一二）
 - 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会編『国会事故調参考資料』（徳間書店、二〇一二）
- 「政府事故調報告書」と「国会事故調報告書」はウェブで公開直後に熟読しました。

- 政府事故調査中間報告書 <http://icamps.go.jp/post-1.html>
- 政府事故調査最終報告書 <http://icamps.go.jp/post-2.html>
- 国会事故調報告書 <http://warpada.adl.go/info:ndlip/pid/3856371/naic.go.jp/index.html>

今回、文書化されたものを借りて、再度（ウェブと文書化で変更点があるか否かの確認、熟読してみました。両者への疑問、特徴、利点、欠点、致命的欠陥、総合判定、未解明問題、残された課題を以下に記します。

【疑問点】

- (1) 責任関係が不明確です。
- (2) 予算が明記されていません（両者とも推定一億円弱）。
- (3) かかわったすべてのひとたち（数十名規模の協力者と事務局員）の氏名が明記されていません。
- (4) 両者とも約一〇〇〇名の聞き取り調査をしているにもかかわらず、その成果が表に現れておらず、大部分のひとたちは、形の見えない出汁になっています。
- (5) 「政府事故調報告書」の資料Ⅱ－2－5の図（資料編二九七頁）は、いくらポンチ絵とは言え、格納容器（Primary Containment Vessel：PCV）の形状が不自然です。
- (6) 脱原発政策を掲げている弱小政党である社民党の福島瑞穂さんの推薦で委員になったひとが三名いると読み取れました。一名の委員には、二名の協力者を指名できることを委員の一人が証言しており、報告書には明記されていませんが、原子力資料情報報室のウェブ情報の中には、同室からの協力者数名の氏名が明記されています。国の事故調査委員会の委員として、党派性が強く、明らかに方向づけされた主義主張するひとが委員に就いてよいものか、特定の組織のひとたちが、それほど多くかかわってよいものか、公正性に疑問があり、不正行為

です。国民は真実を認識しているのか。

【特徴】

(1) 政府事故調は、伝統的事故調査法に徹し、不確実事項を排除し、確実な真実から全体像を組み上げています。

(2) 国会事故調は、会議録を公開し、審議過程を透明化しています。

【利点】

(1) 両者とも分かりやすいまとめ方をしています。

(2) 「政府事故調報告書」のまとめ方は優れています。

(3) 両者とも苛酷炉心損傷事故計算コード（東京電力〔東電〕はM A A P : Modular Accident Analysis Program / 原子力基盤機構はM E L C O R : Methods for Estimation Leakages and Consequences of Releases）による計算結果に信頼を置いた議論をしています。

(4) 「政府事故調報告書」には、「I C について、地震発生から津波到達までの間、その配管及び復水タンクに、その冷却機能を喪失させるような損傷が生じたとは認められない。

（注として欄外に、「なお、地震発生後、津波到達までの間、I C の配管や復水タンクに、その冷却機能を喪失するような損傷に至らない程度の軽微な亀裂、ひび割れ等が生じた可能性を否定するものではない」）しかし、津波が到達した時点で、I C（B系）の戻り配管隔離弁（3B）は全

閉であり、IC（A系）の戻り配管隔離弁（3A）も全閉であったと推測されるが……」（本文編三一頁）と記されており、東京電力が事故直後に公開したプラントデータを的確に解説できています。

【欠点】

(1) 両者とも東京電力から提供された膨大な資料に全面的に依存しており、独自に調査した資料や計算結果に基づく事実関係は、数%以下に留まっています。

(2) 意識的に当事者の原子力関係者を除外し、複数の事故調を設けたにもかかわらず、そのよい意味での効果が表れていません。

(3) 両者とも後知恵の強弁に終始しています。

(4) 国会事故調は、党派性が強く、工学解釈が未熟で、不自然で、作為的で、事故調査法を間違えています。以下、その具体例です。プラントデータから読み取れない配管損傷事象（極小LOCA）を仮定して議論しています。その事象では、圧力や水位などプラントデータに表れないとしている反面、いくら微小漏れでも、一時間あたり七t漏れるとも記しており、それだけ漏れれば、原子炉建屋や格納容器の地下一階に設けられている「機器ドレンサンプ」の水位が上昇し、確実な証拠が残りますが、プラントデータには、そのような痕跡が残っていません。高温の漏水が一時的に空間に充滿しても、やがて、温度が下がれば、凝縮して、水に戻り、「機器ドレンサンプ」に集まり、漏水の有無の判定は、可能です。一つのことだ

けに着目し、予定したストーリーを組み立てるため、関連する複数の事象変化との矛盾に目を瞑った議論をしています。

(5)国会事故調は、聞き取り調査において、あらかじめ想定したストーリーに合うような強引な誘導質問をくり返しており、不正行為です（たとえば、報告書編二三五頁や参考資料編六四一・六五頁など）。

(6)一般論として、サプレッションチェーンバーの地震時スロッシングの三次元カラー図（二四八頁）が掲載されていますが、報告書や会議編や参考資料編を注意深く読んでも、出典が明記されていないばかりか、計算コードや計算モデルや計算者やベンチマーク実験解析による精度評価について、何も記されていません。事故調査に協力した元東芝社員の後藤政志が計算したか手配したことが推定されますが、上記事項を明記したら、不都合な真実が表面化するため、意識的に、ぼかしたものと思います。学術的根拠は明確にすべきです。報告書を熟読して、全体的に、学術的手法ではなく、劇場型問題提起の週刊誌的発想が気になりました。その意味で国の事故調査報告書としては不合格です。指摘された可能性（地震影響説に基づく小LOCA説と一号機D/GのA系列停止説）はすべて工学的に成立しません。

(7)参考資料編に、住民アンケート結果と東京電力・関連会社社員への聞き取り調査結果が記されていますが、ただ記載されているだけで、分析不足です。

(8)小LOCA説は、事故直後から、田中三彦さんが主張してきたことです。田中さんは、脱原発政策政党の社民党推薦により調査委員会委員になりましたが、委員会全員が小LOCA説

を受容した経緯と根拠が読み取れませんでした。工学的根拠のないことを可能性の示唆だけで合意するのは国の事故調査委員会として不適格です。田中耕一委員は、小LOCA説が間違っていることが証明されたならば、責任を取り、職を辞する覚悟はできているのか、ノーベル賞受賞者の田中耕一委員だけでなく、黒川清委員長をはじめとする全員、その覚悟はできているのか？

2 世の中の情報の質についての考察

真実とは何か（真実が分からなければ、限りなく真実に近いことは何か）、情報とは何か、について考えてみました。世の中では、どこそこにこのようなことが書いてあったとか、誰々がこのようなことを言っていたとか、それらを真実の根拠にして話をしています。世の中の話としては、その程度でも、好ましいことではありませんが、利害の生じないこともあり、支障ないかもしれません。情報とは、真実であろうとなかろうと、まとまったお話であれば、何でもかまいません。真偽や価値は利用者が判断することです。

日本には数多くの週刊誌や月刊誌があります。質（quality）は大幅に異なっています。信頼性の高いものもありますが、大部分は、そうではありません。比較的ましな月刊誌『世界』や『中央公論』でも、時々、間違ったエッセーが掲載されています。『世界』は、特に、党派性が高く、偏っ

あとがき

福島第一原発事故についてまとめた各種事故調報告書を、学術的に深く検討した事例はこれまでに一件もありませんでした。本書では部分的にそのような試みがなされています。いまの時点で個人にできることは、限られており、これ以上の解析をするには、人材と予算が必要になりますので、すぐには、実現困難です。しかし、できるだけ、自身で計算し、未解明事項の解明に努めたいと考えています。

福島第一原発事故の工学的事故調査（苛酷炉心損傷事故解析、放出放射能量、自然・人間への影響など）と社会科学的事故調査（エネルギー政策、社会制度など）は、事故後、三年間では、その輪郭を描くことくらいしか達成できません。私は、微力ながら、独自の調査により、それまでの経験と専門知識を基に、何冊かの著書をまとめ、当面の課題を整理することができました。残る課題は、長期的視点から、本書の成果も採り入れ、学術書『福島原発事故の科学』（日本評論社、二〇一二）の改訂版をまとめること、さらに、執筆中の学術書『日本の原子力開発の構造分析』を完成させることです。

私は、これまで、行政側からの要請に背を向けてきました。なぜかと言えば、いまの仕事を進める上で、制約が加わるからです。それは、できるだけ、独立した立場から、自由に、問題提起した

という方針に反するからです。それでも、これまで、行政側からの要請に対し、例外的に、三件の協力をしてきました（内閣安全保障室、科学技術庁原子力安全調査室、島根県原子力安全対策課）。

そんな折、静岡県原子力安全対策課から、二〇一四年三月、静岡県知事への諮問機関である静岡県防災・原子力学術会議原子力部会臨時構成員の要請がありました。熟慮の末、例外的な四件目の受け入れを決意しました。受け入れた理由は二つあります。一つは、原子力安全解析所に在職中、中部電力浜岡原発四号機の安全審査のためのクロスチェック計算に携わったこと、もう一つは、東京大学大学院総合文化研究科で学んだSTS (Study of Science, Technology and Society 科学技術社会論) の研究視点から、発生確率の異常に高い東南海地震による浜岡原発と社会への影響に強い関心を持っていたためです。

東北地方太平洋沖地震は地震研究者さえ予測することができない歴史的規模の地震でした。地震発生のメカニズムは、まだ、よく分かっておらず、発生場所を明確に特定し、定量的評価を下すことができません。いま、浜岡原発が直面している問題は、三・一一前夜の福島第一原発が直面していた問題とまったく同じです。そのため、無関心ではられません。

国や県や市町村の委員会は、官僚的形式組織で、公開された詳細議事録から読み取れることは、報告事項を基に、疑問点の質問や当たり障りのないやり取り程度で、八百長の追認に終始しており、実質的な役割は、何も果たしていないのです。

原子力を例にとれば、北海道、青森県、宮城県、新潟県、福島県、茨城県、静岡県、石川県、福井県、島根県、愛媛県、鹿児島県の原子力安全対策委員会（すべて同じ名称ではない、茨城県と静岡

県の委員会は東京大学依存型でその他は地方大学依存型の議事録から読みとれることは、委員の勉強程度にとどまっており、住民の安全を守る検討内容には、なっていません。最もひどいと思ったのは、福井県の例で、事故で一四年間停止していた「もんじゅ」の再稼働の検討をして、承認した後、燃料交換器構造材の落下事故が発生し、事故調査の結果、技術欠陥が発覚しました。彼らは、原子力機構の報告と資料を鵜呑みにし、何の検討もせず、追認しただけでした。各委員会のしていることは報告事項の追認だけです。一部の住民は、委員会を傍聴していますが、問題が何であるか、まったく、理解できていません。形式的追認主義の弊害が至るところに表れています。根源的に改善しなければなりません。

二〇一四年四月二三日（ヒマラヤ出発前夜に）

桜井 淳

桜井 淳（さくらい・きよし） 1946年群馬生まれ。

1971年、東京理科大学大学院理学研究科修了（理学博士）、2006年東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻研究生修了（科学技術社会論で博士論文作成）、2009年4月から東京大学大学院人文社会系研究科で「ユダヤ思想」や「宗教学」の研究中、2009年9月から茨城新聞社客員論説委員兼務中、2014年3月から静岡県防災・原子力学会会議原子力部会構成員兼務中。

物理学者・社会学者・技術評論家（元日本原子力研究開発機構研究員、元原子力安全解析所副主任解析員、元日本原子力産業会議非常勤嘱託）。

学会論文誌32編（ファーストオーサー21編）および国際会議論文50編（ファーストオーサー40編）。

著書『桜井淳著作集』など単独著書31冊（単独著書・共著・編著・監修・翻訳など51冊）。現在、自然科学と人文社会科学の分野を中心とした評論活動に専念。

日本「原子カムラ」惨状記——福島第1原発の真実

2014年9月10日 初版第一刷印刷

2014年9月20日 初版第一刷発行

著 者 桜 井 淳

発行者 森 下 紀 夫

発行所 論創社

〒160-0022 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronsco.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装丁／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／永井佳乃

ISBN978-4-8460-1353-0 ©2014 Sakurai Kiyoshi, Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。